

第10回

「未来を強くする 子育てプロジェクト」のご紹介

「未来を強くする子育てプロジェクト」では、「子育て支援活動の表彰」と「女性研究者への支援」の2つの公募事業を柱として、おこやかな子育てと夢のある未来づくりを応援しています。

子育て支援活動の表彰

より良い子育て環境づくりに取り組む個人・団体を募集します。各地域の参考になる特徴的な子育て支援活動を社会に広く紹介し、他地域への普及を促すことで、子育て環境を整備し、子育て不安を払拭することを目的としています。

また、東日本大震災などの大きな災害の復興応援のため、特別賞を設けています。



女性研究者への支援

育児のため研究の継続が困難となっている女性研究者および、育児を行いながら研究を続けている女性研究者が、研究環境や生活環境を維持・継続するための助成金を支給します。人文・社会科学分野における萌芽的な研究の発展に期待する助成です。

目次	「未来を強くする子育てプロジェクト」のご紹介	2
	ごあいさつ	3
	講評	4
	子育て支援活動の表彰	6
	女性研究者への支援	23
	第7回(2013年度)受賞者最終報告	28

ごあいさつ

橋本 雅博

住友生命保険相互会社
取締役 代表執行役社長



私たちの人生には、進学や就職、結婚・出産育児や退職、そして病気やケガ、介護など、さまざまなライフイベントがございます。そのような中、住友生命は、人生の不安を解消し、自信と希望をもって、力強く未来に進むための大きな「力」となる生命保険をお届けするとともに、社会の一員として、より良い未来を作っていくために、生命保険と関わり合いの深い社会的課題への取り組みも大切にまいりました。

そのひとつである「子育て支援」事業の大きな柱が、「未来を強くする子育てプロジェクト」です。このプロジェクトは、住友生命の創業100周年記念事業として、2007年より開始し、今回で節目となる10回目を迎えました。これまで表彰させていただいた子育て支援活動は110組、女性研究者の皆さまは101名となりました。

子育て支援に取り組まれる皆さまは、地域に根

付きリレーションシップを大切にしながら趣向を凝らした活動でさまざまな課題と向き合っておられ、東北や熊本など災害によって深刻な被害に見舞われた地域でも懸命な取り組みを続けておられます。また、女性研究者の皆さまは、力強い意思を持って子育てと幅広いフィールドにおける研究の両立に日々取り組まれています。

その姿は多くの方を勇気づけ、またこれからの日本を支えるロールモデルとなるものであり、これを広く世の中に紹介していくことで、社会全体で子どもを見守り育てていく、そして未来を託す子どもたちがのびのびと育っていく環境づくりに向けた支援の輪が広がっていくことを願っています。

住友生命は、これからも皆さまの未来を明るく強いものにするために様々な活動に取り組んでまいります。

選考結果

第10回「未来を強くする子育てプロジェクト」では、2016年7月から9月までの間、「子育て支援活動の表彰」「女性研究者への支援」の2部門の募集をいたしました。「子育て支援活動の表彰」には190組、「女性研究者への支援」には126名のご応募をいただきました。

選考委員による審査を経て各部門の受賞者が決定しました。

表彰数

15組

応募数
190組

子育て支援活動の表彰

- 文部科学大臣賞 / スミセイ未来大賞の1組に授与
- 厚生労働大臣賞 / スミセイ未来大賞の1組に授与
- スミセイ未来大賞 / 2組
- スミセイ未来賞 / 10組
- スミセイ震災復興応援特別賞 / 3組

表彰数

10名

応募数
126名

女性研究者への支援

- スミセイ女性研究者奨励賞 / 10名

講評

「未来を強くする子育てプロジェクト」選考委員

[選考委員長] 汐見 稔幸 白梅学園大学学長、東京大学名誉教授



活動歴の長い団体は地域にとってなくてはならない子育て支援のインフラとしての機能を担うようになり、そのような団体の応援を受けながら、時代にあわせテーマを特化した新しい形の子育て支援活動が誕生する流れが全国各地で生まれつつあるように感じます。「子育て支援活動の表彰」は第10回という節目を迎えますが、これからも新たな素晴らしい活動が数多く誕生していくであろうことが期待される選考でした。また、さまざまな分野で女性の活躍が求められています、それは研究の分野においても同様です。女性研究者のさらなる活躍は、学問の世界にも清新な視点や発想を吹き込んでくれることでしょう。そのことにいち早く着目した点に当プロジェクトの先見性があり、引き続き、先進的な取組みを行うことを期待したいと思います。

[選考委員] 大日向 雅美 恵泉女学園大学学長



「女性研究者への支援」は今回で第10回を迎えました。この10年の間に、研究者や研究テーマは多様化・国際化する一方、女性研究者を取り巻く子育て環境は今なお厳しいことを実感します。このことは同時に、一部の特殊な女性だけが研究に挑むわけではなく、女性研究者となる裾野そのものの広がりを見せているようにも思います。それは、女性研究者が直面している社会的な問題が、外国籍を含めた、日本に暮らす女性の子育て環境における社会的な問題と同義であるとも言え、改めて支援のあり方を深く考えさせられました。

厳しさを覚悟し、強い意志を持って研究に取り組まれている女性研究者が多くいることを心強く感じるとともに、多様な困難が立ちはだかる時代をいかにしなやかに強く生き抜くかを考えさせられる意義深い選考になりました。

[選考委員] 奥山 千鶴子 特定非営利活動法人びーのびーの理事長



時代とともに子育て支援における課題が変化していると感じます。そして、これまでささいな問題とみなされていたことに地域の先輩方がいち早く気づき支援のために立ち上がった、一方で歴史ある団体が従来の活動から一歩踏み込んで新たな課題に着目し、解決に取り組み始めていたり、それぞれに柔軟かつ迅速に対応される姿を大変頼もしく感じました。

子育て環境の課題が個別化・多様化するのにあわせ、それに寄り添う形で各団体が支援の手を差し伸べており、規模の小さな特化された分野において活動しておられる団体にも光を当て、応援できる点に本プロジェクトの意義があるとの想いをあらためて強くしました。



[選考委員] **米田 佐知子** 子どもの未来サポートオフィス 代表



長年にわたり活動を続け十分な実績を積み上げてこられた団体、活動期間こそ短いものの非常にユニークな取組みをされていて今後の活躍が大いに期待される団体など、どの団体を選ばせていただくべきか、ここ数年でもっとも難しく悩ましい選考になりました。

子育て支援活動のなかには、当事者同士が手を取り合い支え合うところからスタートしているものも多くみられますが、その輪のなかに行政や地域の方々を上手に巻き込みながら、活動の方法や内容を広く進化させている様子に改めて敬意を表します。皆様の素晴らしい活動の今後ますますの発展を願ってやみません。

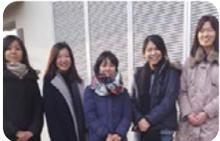
[選考委員] **古河 久人** 住友生命保険相互会社 執行役常務



子育て支援活動の表彰部門では、地域の特色やテーマ、今日的なニーズに対応されるなど子育て支援の多様な広がりを感じ、大変心強く思いました。社会的な支援がまだ十分でない分野において、工夫を凝らし実践されている姿に心より敬意を表したいと思います。また、女性研究者の支援部門では、子育てとの両立に奮闘しながら、それぞれの研究テーマに向き合い、活動を続ける様子が応募書類から垣間見え、女性研究者の皆さまの力強さに感動を覚えました。

また、今回第10回目を迎えますが、複数回ご応募いただいている方も多くみられ、本プロジェクトにけるご期待の高さを感じる選考となりました。本プロジェクトでの支援が、団体や女性研究者の皆さまの一層のご活躍につながることを願っております。

「子育て支援活動受賞団体」のご紹介

p.8	スミセイ未来大賞 文部科学大臣賞 NPO法人 たいようのえくぼ	
p.9	スミセイ未来大賞 厚生労働大臣賞 給食人サークル	
p.10	スミセイ未来賞 特定非営利活動法人 田舎のヒロインズ	
p.11	スミセイ未来賞 特定非営利活動法人 ぎふ多胎ネット	
p.12	スミセイ未来賞 コパ KOPA (Kids Outdoor Play Activity)	
p.13	スミセイ未来賞 NPO法人 女性と子ども支援センター ウイメンズネット・こうべ	
p.14	スミセイ未来賞 NPO法人 ソーシャルデベロップメントジャパン	
p.15	スミセイ未来賞 特定非営利活動法人 多文化共生センター大阪	



<p>p.16</p>	<p>スマセイ未来賞 チームWeB</p>	
<p>p.17</p>	<p>スマセイ未来賞 特定非営利活動法人 未来図書館</p>	
<p>p.18</p>	<p>スマセイ未来賞 特定非営利活動法人 ユースコミュニティー</p>	
<p>p.19</p>	<p>スマセイ未来賞 一般社団法人 ユメ・フルサト (旧名)一般社団法人 物々交換局</p>	
<p>p.20</p>	<p>スマセイ震災復興応援特別賞 特定非営利活動法人 青空保育たけの子</p>	
<p>p.21</p>	<p>スマセイ震災復興応援特別賞 NPO法人 子育て応援おおきな木</p>	
<p>p.22</p>	<p>スマセイ震災復興応援特別賞 相馬助産所</p>	

NPO法人 たいようのえくぼ

沖縄県浦添市 代表者：保志門 るり江

「沖縄の子育てをもっと楽しく」するために、
ママたちが企画・制作するフリーペーパーを発行



活動 内容

子育て情報誌の発行を通じ、子どもたちが健やかで豊かに育つことのできる社会を、
家庭・地域・企業のみinnで創ることを目指します

沖縄の事情に即した子育て情報が好評

県外とは文化も気候も大きく異なる沖縄では、一般に流通する育児誌に掲載されている情報が参考にならないケースが少なくありません。沖縄の実態に即した子育て情報を求めるママたちの声に応えるべく、私たちは「沖縄の子育てをもっと楽しく！」をモットーに、未就学児のファミリーを対象にした子育て情報誌『たいようのえくぼ』を発行しています。

企画から制作まで子育て中のママの手で

誌面ではレジャーなど楽しい情報から社会課題などの硬派な話題まで、沖縄で子育てするうえで知っておきたい情報を総合的に紹介しています。そして企画、編集、制作、配布、協賛協力に至るまでのすべてを子育て中のママが行っている点も、私たちの活動の大きな特徴のひとつです。たとえば協賛企業への訪問や取材、イベントの開催なども子ども連れのママが行い、より共感性の高い当事者目線での情報収集・発信を心がけています。

次なる目標は、離島版『たいようのえくぼ』の発行

発行部数は、号を追うごとに増刷を重ね、現在は21,000部までになりました。発行した各号は児童館やコンビニエンスストアなどの協力を得て県内全域に無料で配布しており、大変好評を博しています。「沖縄本島とは事情が異なる離島向けの子育て情報が知りたい」という声に応じ、スタッフや各種団体、そして地域間のつながりをさらに強化し、離島版の『たいようのえくぼ』を発行することが今後の目標です。

受賞の言葉

スタッフは子育て真っ最中のママたちで、仕事や家事、育児をしながら、時には子連れで企画・取材・制作・営業などを分担して行います。そんなママたちの活動は、家族やサポーターの応援、そしてスタッフ同士の支え合いがあるからこそ。この場を通じて、応援してください。たくさんの方々に感謝を伝えたいと思います。

名称 NPO法人 たいようのえくぼ
活動開始 2008年11月
スタッフ 事務局3名 ボランティアスタッフ22名
連絡先 〒901-2103 沖縄県浦添市仲間1-7-5 3F TEL.080-1746-7937

給食人サークル

京都府京都市 代表者：大江 ヨシ子

離乳食を通じて子育ての悩みを解決する
「まちのきゅうしょくしつ」を開催



活動内容

保育園での経験を活かして離乳食をつくり、
パパママと一緒に赤ちゃんに食べさせながらアドバイスをしています

調理師や栄養士の経験を活かした子育て支援

私たち給食人サークルは、保育園で調理師や栄養士として働いた経験を持つメンバーが中心となり、初めての離乳食づくりに悩む親御さんたちをサポートする活動「まちのきゅうしょくしつ」を開催しています。京都市内4ヶ所で毎月開催し、離乳食づくりに加えさまざまな食材の紹介もあわせて行うことで、メニューのレパートリーを増やしながらか、赤ちゃんの月年齢に応じた離乳食をひと月ごとに学ぶことができます。

各家庭に合った離乳食をアドバイス

離乳食について学ぶ機会は数多くありますが、私たちの活動は参加者との距離感が非常に近い点に大きな特徴があります。目の前で離乳食をつくり、赤ちゃんと一緒に親御さんにも試食してもらいながら、マンツーマンに近い形で調理法等をレクチャーする形式をとることで、各家庭の状況に寄り添ったきめ細かなアドバイスをしています。

離乳食は、食べ物や食事について見つめ直す 絶好の機会

参加者からは「野菜本来の味や出汁そのものがかんنانにおいしいことを初めて知りました」といった声などもたくさんいただいています。離乳食は、赤ちゃんが食事と初めて出会う場であると同時に、親御さんにとっても食事とあらためて向き合う大切な機会でもあります。食べることの大切さや楽しさを広く伝えていく私たちの活動が、子どもたちの健やかな成長と、子育てを頑張る親御さんの助けになれば幸いです。

受賞の言葉

食べることが大好きな子どもに育ってほしい、離乳食づくりが楽しいと思える親になってほしいと願い、自分たちができることを常にスタッフ同士で相談しながら、「まちのきゅうしょくしつ」を運営してきました。今回このような素晴らしい賞をいただき、私たちの活動に光をあてていただいたことに感謝しています。ありがとうございました。

名称 給食人サークル
活動開始 2010年12月
スタッフ 8名
連絡先 〒604-8832 京都府京都市中京区壬生下溝町41-2 TEL.090-2381-5022(大谷)

特定非営利活動法人 田舎のヒロインズ

熊本県阿蘇郡 代表者：大津 愛梨

女性農家の視点を活かした、
ユニークな農業体験プログラムを実施



活動 内容

農村の持つ「育む力」を次世代へつなぐために、
女性農家の視点で子どもたちの「考える力・生きる力」を養う活動を行っています

豊かな農村を次世代へつないでいく

私たちの前身である「田舎のヒロインわくわくネットワーク」は、全国の女性農家がつながりを持つために自発的に発足したネットワークです。現在では「日本の田舎をつなぐ」をモットーに、田舎のあり方、農を営む女性の生き方を模索し、提案・提言していくための活動をしています。その活動のひとつに「豊かな農村を次世代へつないでいくアクション」があります。

考える力・生きる力が身につく農業体験プログラム

10年以上にわたって都会に暮らす子どもたちを農山村で受け入れてきた経験を活かし、今年は「リトルファーマーズ養成塾」という農業経営が学べる合宿をしました。「ファーマーズマーケットを開催する」という目標だけを提示し、そこまでのプロセスや販売方法については全て子どもたちに委ねることで、農業経営以上に、子どもたち自身の「考える力・生きる力」を養うことができました。

農村が食べ物だけでなく、次世代や風景、 エネルギーを作り出す社会を目指して

農家が育てているのは農産物や畜産物だけではありません。農村では風景や生態系、再生可能エネルギーなど多くの資源が育まれており、そうした「育む力」を活かし、豊かな農村を次世代へつないでいく「アクション」に取り組んでいきたいと考えています。その一環として今後、「リトルファーマーズ養成塾」に加え「リトルカーペンターズ養成塾」や「フィッシャーメンズ養成塾」、農山村での子どもたちの国際交流事業などへの展開を計画しています。

受賞の言葉

リトルファーマーズ養成塾は「大人が決めたことじゃなくて、自分たちの決めたことをやる合宿がしたい」との子どもたちの声から始まったプロジェクトです。子どもたちの「考える力・生きる力」を養うことが、豊かな農村を次世代へつないでいくための一歩となります。この受賞を私たちの活動の更なる発展につなげていきたいです。

名称 特定非営利活動法人 田舎のヒロインズ
活動開始 2003年1月
スタッフ 理事8名 会員約160名
連絡先 〒869-1501 熊本県阿蘇郡南阿蘇村両併1283-3

特定非営利活動法人 ぎふ多胎ネット

岐阜県多治見市 代表者：糸井川 誠子

多胎家庭への切れ目のないサポートで、
安心して出産・子育てできる環境の整備を推進



活動 内容

多胎育児の経験を活かし、行政などと連携しながら多胎家庭のニーズに合わせて
妊娠期から子育て期まで切れ目のない支援をしています

多胎育児経験者を中心とした支援ネットワーク

県内に拠点を置く多胎サークルのリーダーたちが
集まって交流会を開催したことをきっかけに、「ぎふ
多胎ネット」は設立されました。社会的に孤立しがち
で、単胎家庭に比べて虐待リスクが高いとも言われる
多胎家庭に対して、多胎育児経験者が中心となって
当事者目線の支援を行うことで、安心して多胎児を産
み育てることのできる社会の実現を目指しています。

切れ目のない家族支援サービス「ネウボラ®」を目指す

多胎児の出産を控える家庭に向けた「多胎プレパ
パママ教室」や妊産婦に対する「病院サポート訪問」
に始まり、育児の不安や悩みを個々に相談できる
「家庭訪問」、介助も含めた「多胎児健診サポート」、
そして未就園児をもつ多胎家庭が交流できる「多胎
育児教室」など、妊娠期から子育て期までの各段階
に応じた切れ目のない支援に取り組んでいます。また
多胎家庭に何が起きているのか「大変さの中
身」を広く知ってもらうことで、社会の理解を深め、
支援の輪を広げられるよう『多胎白書』の発行や研

修プログラムの開発なども精力的に行っています。

安心して多胎児を出産・子育てできる環境を広く全国に

私たちはこれまで、県内のすべての市町村を訪問
し協力体制を築いてきました。そうした地道な取組
みが奏功し、今では岐阜県は、多胎家庭支援に関し
て先進的な地域との評価を得ています。しかしなが
ら、多胎育児の困難さなどに対する社会の認識・理
解はまだ十分とは言えないのも事実です。今後は各
種支援活動を通じて、多胎家庭への支援の必要性
や、子育てそのものの素晴らしさを広く世に伝えて
いきたいと思っています。

受賞の言葉

岐阜県内の76名のサポーターとの10年間の地道な活
動を認めていただき、ありがとうございます。これまで
応援してくださった方々のおかげです。この受賞が、見
過ごされがちな社会課題に気づいていただけるきっか
けとなり、同じように多胎支援に奔走する全国の仲間た
ちの励みとなり、多胎支援が広がればうれしいです。

※ フィンランドで行われている、妊娠から出産、育児まで切れ目なくサポートする総合支援サービス

名 称 特定非営利活動法人 ぎふ多胎ネット
活動開始 2006年11月
スタッフ 岐阜県内全域にサポーター76人(非常勤)
連絡先 〒507-0814 岐阜県多治見市市之倉町13-83-536 TEL.0572-24-2322

スミセイ未来賞

コバ KOPA (Kids Outdoor Play Activity)

東京都世田谷区 代表者：矢郷 恵子

都会に暮らす乳幼児に外遊びの場を提供する
「プレーリヤカー」で公園を巡回



活動 内容

公園を乳幼児の遊び場として活用するための、
リヤカーに外遊びの遊具を積んだ「プレーリヤカー」での出前型遊び場づくり

乳幼児が水遊び・泥遊びを楽しめる場をつくりたい

10年ほど前に、子育て期の公園利活用について調査したところ、水遊び・泥遊びのニーズが非常に高いことがわかりました。世田谷区は23区では比較的自然の多い地域ではありますが、住宅の集合化や街並みの都市化に伴い、外遊びを存分に楽しむことのできる場が年々少なくなっているのが現状です。そうした状況を踏まえ、街中の公園を子どもたちの外遊びの場として有効に活用するための「プレーリヤカー」の巡回を開始しました。

いつもの公園が特別な遊び場に

90cm×60cmの小さなリヤカーに積み込むのは、簡易な道具や遊具に過ぎません。しかし、「プレーリヤカー」が到着すると、いつもの公園はたちまち普段とは異なる、外遊びが存分に楽しめる特別な空間に早変わります。子どもたちがのびのびと外遊びを楽しむ姿は、一緒に参加している親御さんの心と体も解きほぐすようで、リラックスしたムードで親御さん同士のコミュニケーションも自然と生ま

れ、情報交換や交流の場にもなっています。

行政や多様な担い手との連携により定着

一過性のイベントではなく、日常の遊び場として定着しつつあることに手応えを感じています。「プレーリヤカー」の取組みは現在、区内7つの団体で導入され、年間の実施回数は150回を数え、未実施地域からのお誘いも大変多くなっています。今後は講演会・講習会を通じて「プレーリヤカー」のノウハウや効果を伝えることで、外遊びの機会を広く提供していきたいと思っています。

受賞の言葉

乳幼児の外遊びを活発にするために、身近な公園での遊びのしかけづくり、プレーパークでの乳幼児サロンの普及、公園遊びのサポーターなどの育成や研修を実施しています。今回の受賞で「プレーリヤカー」を知ってもらい、乳幼児の外遊びへの関心を高められるとても大きな可能性をいただき、うれしく思います。ありがとうございました。

名称 KOPA(Kids Outdoor Play Activity)
活動開始 2006年4月
スタッフ 8名
連絡先 〒155-0033 東京都世田谷区代田3-31-2 矢郷方 TEL.090-4226-8078

NPO法人 女性と子ども支援センター ウィメンズネット・こうべ

兵庫県神戸市 代表者：正井 禮子

困難を抱える女性やひとり親家庭のための
居場所づくりと、貧困の連鎖を断ち切るための
学習支援を実施



活動 内容

貧困や孤立に悩むDV被害女性や母子を対象に、
安心できる居場所(WACCA)を提供し、相談や学習支援を行っています

さまざまな困難を抱える女性や母子の居場所づくり

20年以上にわたりDVシェルターの運営等に携わるなかで、DV被害により離婚された女性の生活再建が非常に厳しいという現実を目の当たりにしてきました。DVの後遺症、貧困、子育ての困難などさまざまな問題を抱える女性やシングルマザーたちを支援するために、2013年に「WACCA(わっか)」を設立。孤立感を解消し、安心して過ごせる居場所「シングルマザーズ・カフェ」の運営をはじめ、心の回復や経済的自立をサポートするための活動を行っています。

ひとり親家庭の子どもの学習をサポート

神戸市長田区周辺は、生活保護世帯や児童扶養手当受給の母子世帯が市内でも特に多い地域となっています。貧困問題は教育格差を生み、それが新たな貧困や暴力の問題を引き起こすケースも少なくありません。ひとり親家庭を対象にした「WACCA塾」では、経済的な理由等により通塾が困難な家庭の子どもたちを受け入れ、無料で学習

支援を行っています。

経済的な自立を目指す母親のための学びの場

シングルマザーを対象にした保育つきの学習支援「WACCAスクール」を開設し、貧困のスパイラルを母子双方から断ち切るための支援活動を行っている点が特徴です。経済的な自立を目指すうえで、母親たちの目標は、高卒認定試験合格や資格取得など多種多様です。皆で支え合いながら、それぞれの目標を目指して日々頑張っています。

受賞の言葉

DV被害女性や子どもの生活再建は非常に難しく、貧困に加えて孤立した子育てから児童虐待に陥ることもあります。スタッフが常駐し、相談したり、仲間にも出会える居場所は、孤立感の解消や自尊感情の回復につながります。制度の狭間にある事業のため財政難ですが、活動が評価されたことは今後の大きな励みとなります。

名称 NPO法人 女性と子ども支援センターウィメンズネット・こうべ
活動開始 1992年4月
スタッフ 16名
連絡先 〒653-0036 兵庫県神戸市長田区腕塚町5丁目5-1-206
TEL.078-798-6150 WACCA(わっか)

NPO法人 ソーシャルデベロップメント ジャパン

東京都足立区 代表者：矢部 弘司

0～18歳までの重症心身障がい児のための
通園施設と、障がい児相談支援事業を運営



活動 内容

重症心身障がい児が誰とでもコミュニケーションが取れる、
家族が休息を取りながら就労することの自由が約束された社会を創っています

都内初となる親子分離型通園施設を開設

2012年に開設した親子分離型通園施設「療育室つばさ」では、就学前の重症心身障がい児の受入れと日中の活動提供を行っています。当園では看護師が常駐することで医療的ケアが必要な子どもたちに対応していますが、このような施設はまだ不足しています。利用希望者は増え続けており、人材の育成も含めた受入れ体制をより充実させていく必要性を日々強く感じています。

子どもたちの社会性を育むための工夫

重症心身障がい児は家の中で家族と過ごす時間が長く、社会性を育む機会が限定されてしまいがちです。そこで当園では子どもたちが外の世界にふれ、同年齢の子どもたちと過ごすことのできる時間を積極的に設けるように努めています。具体的には、音楽療法、感覚遊び、読本、リハビリといった多岐にわたる活動に加えて、遊園地や動物園への外出、近隣の保育園との交流なども定期的に行っています。

医療関係者からも頼られる存在に

乳幼児期から学齢期までの重症心身障がい児を受け入れる通園事業や相談支援事業など、活動の広がりにも取り組んでいます。こうした地道な取り組みを続けることで、重症心身障がい児を持つ家庭に加え、医療従事者や保健師、訪問看護ステーションの職員などからも相談を受けることが増えました。多様化する支援ニーズに対応できる体制づくりを、今後は地域と協力しながら進めていきたいと考えています。

受賞の言葉

活動開始から4年が経ち、仲間を支えられて2016年11月に施設「FLAP-YARD」を新築しました。医療の進歩によって増え続ける重症心身障がい児を支えていくには、人材育成、施設整備、法整備全てが発展しなければなりません。この賞をきっかけに多くの人たちが私たちと仲間たちの活動に関心を持ってくれるはず。ありがとうございました。

名称 NPO法人 ソーシャルデベロップメントジャパン
活動開始 2012年7月
スタッフ 15名
連絡先 〒123-0873 東京都足立区扇1-44-15 FLAP-YARD TEL.03-5809-5388

特定非営利活動法人 多文化共生センター大阪

大阪府大阪市 代表者：田村 太郎

外国にルーツを持つ子どもたちのための 学習支援教室を開催



活動 内容

学習支援教室「きらきら」を通して、外国にルーツを持つ親子をサポートし、地域との交流・相互理解を深められるよう活動しています

20年以上にわたり支援活動を実施

阪神淡路大震災発生の翌日から、被災した外国人に対して多言語による情報提供を行った「外国人地震情報センター」が私たちの活動の前身です。情報提供活動を通じて、外国人住民への継続的な支援の必要性を強く認識した私たちは、その後「多文化共生センター大阪」と名称を改め、多文化共生に関する調査や啓発を含む各種支援活動を20年以上にわたって続けてきました。

外国にルーツを持つ家庭の生活と学習をサポート

主な活動として、学習支援教室の実施と学習相談支援員の派遣を中心に行っています。週1回開催している学習支援教室は、外国にルーツを持つ小中学生の基礎学力の向上や日本語の習得を手助けし、子どもたちの放課後の居場所としても定着しつつあります。一方、学習相談支援員の派遣活動では家庭訪問を通じて、学習のみならず生活全般に関して広く相談に乗ることで、外国人住民が抱える孤立感の解消に取り組んでいます。

行政などと協力して地域の課題解決を図る

大阪市西淀川区は全国的に見ても外国人住民の割合が高く、そのなかには不安定な雇用や母子家庭のため育児・教育に不安を抱えている家庭も少なくありません。私たちの活動を応援してくれている地元商店街や行政などの協力も得ながら、言葉や文化の違いから生まれる課題やニーズをより詳細に把握し、それを実効性のある政策提言にまでつなげていくことが、私たちの今後の目標です。

受賞の言葉

このたびは素晴らしい賞をいただき厚く御礼申し上げます。言語の壁などによって、学びやコミュニケーションの機会を失いがちな外国にルーツを持つ子どもたちは少なくありません。今回の受賞を自信につなげ、今後子どもたちや保護者を多角的にサポートしてまいります。

名称 特定非営利活動法人 多文化共生センター大阪
活動開始 1995年1月
スタッフ スタッフ2名 ボランティア35名
連絡先 〒532-0023 大阪府大阪市淀川区十三東2-6-7徳島ビル2F TEL.06-6390-8201

チームWeB

兵庫県姫路市 代表者：小嶋 明

車いすバスケの体験型交流会を通じて、
ノーマライゼーション社会の実現を目指す



活動 内容

年間約50校を訪問し「車いすバスケットボール体験交流会」を実施、
毎月1回「車いすバスケットボール教室」を開催しています

ノーマライゼーション社会の実現のために

障がい者に対する社会インフラは整備されつつある一方で、その生活に対する理解はまだ十分とは言えません。「障がい者スポーツを通じ、真に豊かな生活を考え、ノーマライゼーションの実現を図る」ことを理念として掲げる私たちチームWeBは、県内外の学校を訪問し、車いすバスケットボールの体験型交流会を開催する活動を行っています。

障がいを持つ選手たちとの交流を通じて学ぶこと

交流会の内容は、車いすバスケットボールの説明に始まり、選手によるデモンストレーション、生徒たちの体験乗車、ミニゲームなど盛りだくさんです。迫力あるプレーを間近で観たりミニゲームと一緒に楽しむことで、それまで抱いていた「障がい者＝弱者」というイメージを一変させる子どもも少なくありません。参加した子どもたちから寄せられるたくさんの手紙が、この活動を続けていくうえで大きな励みにもなっています。

障がい者スポーツを盛り上げ、すそ野を広げたい

啓発と体験の機会を広く提供するために、一般市民向けの「車いすバスケ教室」も定期的に開催しています。こちらは多様な団体と連携することで、車いすバスケに限らず、さまざまな障がい者スポーツが体験できる内容になっています。2020年東京オリンピック・パラリンピック開催を追い風に、私たちの活動が障がい者スポーツの振興や、ノーマライゼーション社会の実現の一助になれば幸いです。

受賞の言葉

活動を通して出会った子どもたちは、70,000人に上ります。子どもたちの笑顔が、16年間のべ650校に及ぶ学校訪問を続けてこられた原動力です。受賞を契機に、障がい者スポーツの認知度を高め、子どもたちの成長とともにノーマライゼーション社会の実現を図る活動を続けていきたいと思えます。

名称 チームWeB
活動開始 2001年4月
スタッフ 20人(非常勤)
連絡先 〒671-1204 兵庫県姫路市勝原区朝日谷247-5 TEL.080-1418-5912(小嶋)

特定非営利活動法人 未来図書館

岩手県盛岡市 代表者：古澤 眞作

大人の想いにふれて、子どもたちが
自らの将来をイメージする機会を



活動 内容

多様な生き方や価値観を持つ大人と子どもたちが直接出会い、
共に学び合うプログラムを県内の小中高校の授業のなかで実施しています

子どもたちに働くことの意義を伝えるプログラム

人口流出など地方都市の厳しい現実に加えて、震災からの復興という大きな課題を抱える岩手県では、地域に根差したキャリア教育が求められています。一方で、将来に夢を描けない若者が増えている現状に対し、私たちは主に「未来パスポート」「かだる」という2つのプログラムを通じて、子どもたちと社会をつなぎ、仕事や将来について考える機会を提供する活動を行っています。

大人との交流を通じて社会を知り、将来を思い描く

「未来パスポート」は小中高校生と社会で活躍する大人（社会人講師）の交流を目的としたグループワークで、社会人講師が自らの経験を語り、子どもたちが質問を投げかける対話を通じて、将来の姿を思い描ききっかけづくりを行っています。また、「かだる」は中学生から20代前半の生徒・若者を対象に、ひとつのテーマを掘り下げて真剣に語り合い、人と「通じあう」楽しさを体感し、「自分の言葉」で語るコミュニケーションの大切さを伝えています。

良好なパートナーシップにより活動を推進

これまで1,200名を超える社会人講師、学生に参加をいただいておりますが、将来について真剣に考える子どもたちとの交流は、講師にとっても自らの生き方や働き方を見つめ直す良い機会になっているようです。また、講師を派遣してくれた協力企業からは「社員教育にもつながる」と好評をいただき、活動をサポートしてくれる社会人講師や協力企業と良好な関係を築くことができています。

受賞の言葉

このたびは、「スミセイ未来賞」受賞の栄誉を賜り感謝申し上げます。私たちは、子どもと社会をつなぐことをミッションとして活動しています。今回の受賞を機に、キャリア教育支援プログラムを大学生を中心とした若者のインターンの場としても展開するなど、更に拡大したいと考えています。

名称 特定非営利活動法人 未来図書館
活動開始 2004年12月
スタッフ 4名
連絡先 〒020-0878 岩手県盛岡市肴町4-20 永卵ビル3F TEL.019-654-6601

特定非営利活動法人 ユースコミュニティー

東京都大田区 代表者：濱住 邦彦

地域住民や地元商店などが協力して
子どもたちの学力と社会性を育む



活動 内容

「昭和の塾」のように温かく、一人ひとりに寄り添った学習支援を地域の連携(企業・生協・福祉・市民)のもとで取り組んでいます

子どもたちにより良い学習環境を提供するために

学習環境の違いが進学率に影響を及ぼすなど、教育の格差が社会問題になっています。そのようななか、子どもたち自身が「学び方を学ぶ」ことを目的に、私たちは「自由塾」を立ち上げました。ひとりでも多くの子どもたちが夢に向かって進んでいけるように、ここでは生徒の気持ちに寄り添いながら背中を押す、温かな、そして良心的な費用で学習指導を行っています。

学力だけでなく、子どもたちの社会性も育む

自由塾では小学4年生から中学生までを対象に、これまで約300人の子どもたちの学習をサポートしてきました。卒業生のほとんどが高校受験で合格を果たすなど、学力向上の面で大きな成果を挙げています。また基礎学力に加えて豊かな社会性をも育むために、食育や自然観察をテーマにした課外授業・レクリエーション活動なども定期的に開催しています。そうしたイベントは、子どもたちにとってかけがえのない思い出づくり・絆づくりの場にも

なっています。

地域の課題は地域の力で解決する

自由塾の活動には、経歴も年齢もさまざまな70名を超えるボランティアスタッフが参加しています。また学習に必要な教材や教室に関しても、私たちの活動を応援してくれる企業や商店、生協、福祉施設などが快く提供してくださり、民間の学習塾と遜色ない学習環境を整えることができました。未来ある子どもたちを、地域全体の力で支える仕組みがここでは築かれつつあります。

受賞の言葉

子どもたちを取り巻く環境に明るい未来があるとはまだ素直に言えないところもありますが、ここまで活動をやってこれたのは、地域のみなさんのご協力と温かいご支援のおかげです。一層の飛躍に向けて、まずは私たちのやれることを精一杯やっていこうと思っております。ありがとうございました。

名称 特定非営利活動法人 ユースコミュニティー
活動開始 2009年5月
スタッフ 常勤5名 非常勤40名 ボランティア70名
連絡先 〒143-0024 東京都大田区中央8-22-13 TEL.03-6428-7123

一般社団法人 ユメ・フルサト

愛知県豊田市 代表者：吉田 大章

あたたかな地域コミュニティを再生するために、
地域通貨を活用した「こども夢の商店街」を開催



活動 内容

働く笑顔があふれるコミュニティの再生を目指し、
「こども夢の商店街」を通じておむすび通貨の発行をしています

自然に根差した地域通貨でコミュニティを再生

人と人をつなぎ、お金で換算できない価値をやりとりすることのできる物々交換に着想を得て、米本位制の地域通貨「おむすび通貨」を発行するところから私たちの活動は始まりました。現在はその仕組みを活用して、子どもたちに働く喜びを体験してもらう「こども夢の商店街」を、地域の学校や商店、NPO、行政などと連携して開催しています。

リアルな体験を通じて得られる子どもたちの成長

「こども夢の商店街」に参加する子どもたちは、自ら出店する「お店屋さん」やハローワークで見つける「オンゴト」を通じて、地元の商店街でも使用できる「おむすび通貨」を入手します。子ども向けのプログラムとしてではなく、実際の仕事や買い物にできるだけ近い体験ができる点が大きな特徴です。大人たちは裏方作業に徹し、子どもたちが試行錯誤する様子をそっと見守ります。子どもたちの表情は真剣そのもので、そうした体験を通じて自発性や創造力を身につけていきます。

子どもにも保護者にも人気のイベントとして定着

三河地方を中心にこれまで20回以上にわたって開催してきた「こども夢の商店街」は、来場者数はのべ7万人を数え、子どもの参加者のうち約4割をリピーターが占めるなど、大人気のイベントとなっています。保護者の方からも「子どもの成長が実感できる」「子どもと一緒に大人も夢になれる」といった声をたくさんいただいております。その満足度の高さが人気の要因となっているようです。

受賞の言葉

地域の方々が立場を超えて私たちの活動を支えてくださったおかげで、お金のあり方から地域社会を変えようという取組みがこのような形で評価され、大変うれしく思います。これからも、大人になることに子どもたちが希望を持ち続けられるように、働く笑顔があふれる社会を皆さまと共に創造したいと思います。

名称 一般社団法人 ユメ・フルサト (旧名)一般社団法人 物々交換局 2017年3月1日付名称変更
活動開始 2010年4月
スタッフ 4名(常勤1名)
連絡先 〒444-2303 愛知県豊田市野林町カウロゲ46-5 TEL.0565-50-8550

特定非営利活動法人 青空保育たけの子

福島県福島市 代表者：辺見 妙子

子どもたちに外遊びを楽しんでもらうため、
福島から山形県米沢市への移動保育を実施



活動 内容

笑ったり泣いたりけんかもある、そんな子どもたちが自然のなかで、自分で考え、自分で行動し、イキイキと目を輝かせています

福島の子どもたちに外遊びの楽しさを

東日本大震災に伴う原発事故以降、福島では子どもたちを自然のなかで安心して遊ばせることが難しくなりました。そこで「青空保育たけの子」では福島市から放射能の影響が少ない山形県米沢市まで子どもたちと一緒に移動し、外遊びや自然体験の機会を提供する移動保育を行っています。虫取り、花摘み、泥遊びなど福島では楽しむことが難しくなった外遊びに熱中する子どもたちの笑い声が、ここにはいつもあふれています。

「あぶない・きたない・ばかばかしい」を見守る

農業体験では種から野菜を育て、収穫後は自分たちで包丁など調理器具を使って調理しますが、その際にも大人は余計な口出し・手出しをすることはありません。子どもたちの「あぶない・きたない・ばかばかしい」に対し、大人の価値観で行動を制限するのではなく、子どもたちの自由な発想や創造的なチャレンジを温かく見守る保育を行っています。

豊かな自然のなかで親子が楽しめるイベントも開催

移動保育がお休みの土日には、手づくりの遊具が並ぶ広場を「冒険遊び場」として広く開放しています。ピザづくりやハンドクラフトといった自然の豊かさや恵みを五感で感じることでできるイベントなども定期的に開催しており、多くの親子に参加をいただいています。「冒険遊び場」は外遊びの場であると同時に、福島市と米沢市の周辺地域に暮らす親子をつなぐ交流の場にもなっています。

受賞の言葉

今回の受賞は、正直うれしい驚きです。私たちの活動にこのような評価をいただき、スタッフ一同励まされています。片道50キロ、1時間以上の道のりを毎日移動しながら保育するのは、大変でもあるのですが、結果、子どもたちにとって心身共に一番ストレスのない方法です。これからも皆から愛される「たけの子」であり続けます。

名称 特定非営利活動法人 青空保育たけの子
活動開始 2009年4月
スタッフ 6名
連絡先 〒960-8161 福島県福島市郷野目字金込町8(事務所)
〒992-0118 山形県米沢市上新田1166(活動場所) TEL.070-1143-1166

NPO法人 子育て応援おおきな木

熊本県上益城郡 代表者：木村 由美子

被災した子どもたちのための遊び場支援と、
仮設住宅を訪問する巡回型サロンを実施



活動内容

被災後、遊び場や居場所がなく、不安でいっぱいになった子どもたちと子育て家庭が一日も早く日常へ戻れるよう支援しています

過酷な状況で頑張る子育て家庭を支えたい

子育て家庭の交流の場として「つどいの広場とんとん」を開設し支援内容の充実を図っていた最中、私たちは熊本地震に見舞われました。活動拠点は使用できなくなり、スタッフ自身も被災していましたが、復興と育児に追われるご家族の負担を少しでも軽くしたいと考え、地震発生の翌月には避難所の一角に仮の拠点を設けて、子育て家庭のための支援活動を再開しました。

多彩なプログラムで、被災した子どもたちの遊びを支援

これまで行ってきた「つどいの広場とんとん」の運営や各種講座の開催、そしてファミリーサポート事業などに加えて、震災直後から新たに始めたのが「週末の小学生の遊び場支援活動」です。被災した子育て家庭が家の片付けに専念できるよう、週末限定で子どもたちを受け入れる広場活動としてスタートしましたが、現在はさまざまな分野の専門家の協力のもと多彩なプログラムを実施し好評を博しています。

復興途上にある熊本で継続的なサポートを

子育て中の母親の相談に乗ったり息抜きの時間を提供したりするために、町内の仮設住宅16ヶ所を定期的に訪問してサロンを開設する巡回事業も新たにスタートさせました。町にはがれき置き場が目立ち、今なお多くの被災者が仮設住宅での暮らしを余儀なくされるなど、熊本はいまだ復興の途上にあります。被災した子育て家庭のニーズを汲み取りつつ、これからも息の長い支援活動を続けていきたいと思っています。

受賞の言葉

親子で過ごせる場所、親同士が育ちあえる場所を作りたいと、子育てサロンから始め、振り返ると12年になっていました。突然の地震で活動場所をなくし、途方に暮れましたが、全国からたくさんの支援をいただき、幅広いネットワークができました。地震で大変な思いをしたときに、このような素晴らしい賞をいただき感謝の気持ちでいっぱいです。

名称 NPO法人 子育て応援おおきな木
活動開始 2005年4月
スタッフ 常勤2名
連絡先 〒861-2242 熊本県上益城郡益城町木山236 TEL.096-289-1631

スミセイ震災復興応援特別賞

相馬助産所

福島県相馬市 代表者：宮原 けい子

被災地に暮らす母子をサポートする
助産師のいる子育てサロンを開催



活動 内容

福島県相馬市で、産後の母子への育児訪問、来所・日帰りケアと、母子向けに子育てサロンを開催する活動を行っています

地域の助産師としてできること

津波と原発事故の被害が大きかった福島県相馬地域で助産所を開設し、不安や孤独を抱えながら子育てを行っている母親たちの心身のリフレッシュを目的にしたサロンを開催しています。震災によって地域の医療体制が十分な機能を果たせなくなり、困っている母子のために助産師として何かできることはないかと考え、活動を開始しました。

母親同士の情報交換・交流の場に

子育てサロンではベビーマッサージや赤ちゃん体操、産後ヨガなどのプログラムを実施しています。心地の良い汗を流したあとは参加者同士で自然と輪ができ情報交換が行われるなど、震災後家に閉じこもりがちだった母親たちにとって交流する良い機会につながっているようです。産後1年経つと母親たちはサロンを卒業することになりますが、次に出産する際にも「また相馬助産所を利用したい」と言ってくださる方が多く、その言葉が私たちにとって何よりの喜びです。

福島の子育て環境改善のために尽力

障がい児とその母親が集うサロン「おひさまクラブ」でも、各種勉強会などの企画を通じて母親同士の情報交換や交流を図っています。行政、病院、保健所などとのネットワーク強化にも取り組んでおり、さまざまな支援活動を円滑に行えるようになってきました。今なお課題を抱える福島の子育て環境を、より良いものにしていくために地域一丸となって取り組んでいます。

受賞の言葉

震災や原発事故は、母親たちの不安や悩みをより深いものにしました。この特殊な環境のなかで、出産・育児をしている母親たちのサポート役として、さまざまな協力を得ながら活動してきたことを認めていただき、心より感謝いたします。母子は福島之宝であり未来です。今後も母子の成長を楽しみながら活動していきたいと思います。

名称 相馬助産所
活動開始 2013年7月
スタッフ 2名
連絡先 〒976-0014 福島県相馬市北飯淵1-10-22 TEL.080-6012-4181

スミセイ女性研究者奨励賞



飯塚 真弓

高崎経済大学
地域科学研究所

研究
テーマ

南インドのヒンドゥー教寺院司祭集団をめぐる
宗教実践とその変貌

内容：本研究では南インド、チダンバラムのヒンドゥー教寺院司祭集団を対象に、彼らの宗教空間と祭祀儀礼における実践について考察する。カースト制度の頂点に位置するバラモンの寺院司祭は、清浄への意識が非常に強く、伝統的慣習を重んじるため、特に家内空間における祭祀儀礼に関する調査事例が極めて少ない。本研究により、インド古典学、宗教学等関連する隣接研究分野に貢献できる博士論文・単書をまとめ上げたい。

受賞の言葉

昨年4月に出産後、2ヶ月足らずで大学助手として復帰をしました。子どもと向き合う時間を多く作ってあげたいと思う反面、研究者としてのキャリアを築くためには、絶えず研究実績を積み重ねていく努力も不可欠です。仕事と育児、研究のバランスをいかに保つか、迷い、葛藤する日々のなか、受賞の報告をいただき、とても励まされました。本助成をはじめ、家族や周りの方々の支援に深く感謝しつつ、研究者としての飛躍を目指したいです。



井家 晴子

国立民族学博物館

研究
テーマ

帝王切開をめぐる社会文化的背景と
医療技術を取りまく妊産婦の身体観
-日本とオランダの臨床現場での比較を通して

内容：日本国内では過去20年間で帝王切開による出産が倍増している。これは、帝王切開を受けた女性の大多数が、次の分娩でも帝王切開を選択することが大きく影響している。一方、自然出産のメッカとされるオランダではほとんどの女性が帝王切開後は経腔分娩(Vbac)を選択している。本研究では日本とオランダでは、なぜ、同じ帝王切開術をめぐる判断が両国で大きく異なっているのかを、帝王切開を巡る社会文化的環境、医療技術の捉え方、および身体観の比較を通して明らかにする。

受賞の言葉

長女を緊急帝王切開で出産し大変な苦労を経験したため、次女の出産時には経腔分娩(Vbac)を選択しました。現在、日本では、Vbacを行う医療施設は少なく、子宮破裂のリスクを理由に多くの医療関係者が否定的です。しかしヨーロッパの多くの国では、普通にVbacが行われています。今回の助成で、多くの女性たちが子育てをしながらも第一線で活躍しているオランダと日本との出産環境の比較を試みたいと考えています。このたびは励みになる賞をいただき本当にありがとうございました。

スミセイ女性研究者奨励賞



井上 直美

日本貿易振興機構
アジア経済研究所
新領域研究センター
「ビジネスと人権」プロジェクト

研究
テーマ

**ビジネスと開発: 開発途上国で操業する
企業の人権尊重の取り組みとその影響を探索**

内 容 : グローバルに操業する企業によって開発途上国にもたらされる、人権侵害をはじめとする負の影響を最小限にすることは重要な課題である。本研究では、その主たる原因であるガバナンス・ギャップを狭めるには、企業の自主的な取り組みと国家や国際機関による法的規制の、いずれのアプローチが有効であるかを考察する。進出する企業の取り組みの現状と、それによって与えられる人々の権利への影響及び生活向上への役割を明らかにしたい。

受賞の言葉

このたびは助成対象に選んでいただきありがとうございます。実質ひとり親の状況で育児と研究に取り組んでおりますが、同じように頑張っている友人たち、離れて暮らす夫や義母、理解ある職場、保育所や小児科の先生たち、地域の病児保育室、そしてファミリーサポートの方々の助けを得て、前向きに取り組むことができました。これからも、支えてくださる方々への感謝の気持ちを忘れず、一層邁進いたします。



菊池 美由紀

名古屋大学大学院
教育発達科学研究科

研究
テーマ

大学生のキャリア科目における学び

内 容 : 現在多くの大学ではキャリア科目が開講されているが、先行研究によると学生からも卒業生からもその評価が高いとは言いがたい。しかし、なぜ評価が低いのか、評価した学生の特徴や、授業内容や方法などは十分に明らかにされていない。そこで本研究では、キャリア科目の授業及びリアクションペーパーを分析することによって、受講者がキャリア科目から何を学んでいるのかを、学生の所属大学パターンごとに明らかにする。

受賞の言葉

社会人院生として入学し、家族に負担をかけながらも研究を行うことは、苦勞を伴います。「今さらなぜ？」と周りから言われながらも続けてきた研究に、このような助成金をいただけることは大きな励みとなります。年齢や子どもがいるという理由でやりたいことをあきらめるのではなく、努力することは無駄ではないと子どもに示せるように、そして少しでも誰かの役に立てるよう、研究に邁進する所存です。このたびは本当にありがとうございました。



澤田 彩

大阪市立大学 経営学研究科

研究
テーマ

太陽光発電システム産業の国際比較分析研究

内 容： 現代社会において地球温暖化対策は、企業が経済活動を行ううえでの前提条件あるいは競争力の源泉ともなりつつある。このような状況を背景として、地球温暖化対策として効果的な太陽光発電を巡る各国の政策や電力供給体制、そして関係する企業の動態は、各国の地球温暖化対策を前提とした国際競争の様相を浮き彫りにする。本研究では、ドイツ、米国カリフォルニア州を日本の比較対象として取り上げて分析することによって、今後の日本の産業競争力の育成方針を展望する。

受賞の言葉

このたびは助成対象に選定していただき、誠にありがとうございます。私が研究を続けることによって家族にさまざまな負担を強いていたことから、研究を続けていくことに迷いが生じていました。そんななかいただいたこのたびの受賞のお知らせは、私にとって今後も研究を続けていくための希望の光でした。本助成を契機に、研究者として一層飛躍することによって、後に続く女性研究者のひとつのロールモデルとなれるよう精進したいと思います。



嶋内 佐絵

横浜市立大学
国際総合科学部 非常勤講師

研究
テーマ

高等教育におけるカリキュラムの国際化と「国際教養」の地域間比較教育研究

内 容： 本研究の目的は、高等教育カリキュラムの国際化に関し、特に教養概念と国際化との融合的発展に注目し、地域間(北東アジア・東南アジア・欧州)比較という視点から実証的に調査し、その特徴を分析することである。各地域における「国際教養」の歴史的発展と理念を整理するとともに、そのビジョンやカリキュラム、具体的実践を検討してその様相と課題を提示し、「国際教養」のあり方を模索する。

受賞の言葉

博士号を取得後、ポスドクをしながら大学での仕事を探している最中に2人の子どもを授かり、自分にとって、また子どもの成長や幸せにとって何が大事かを模索しつつ、多くの「若手」大学教員に求められるような長時間労働ができず、不安と焦りを感じていました。今回このような助成の機会をいただき、子どもを保育園に通わせながら、研究や教育活動を続けることができることをとてもうれしく、光栄に思います。ありがとうございます。

スミセイ女性研究者奨励賞



張 勝蘭

早稲田大学
総合人文科学研究センター 助手
※2017年4月より
早稲田大学文学学術院非常勤講師

研究 テーマ

貴州高坡苗族伝統社会とその文化の変遷

内 容：本研究は、中国貴州省高坡苗族を対象に、明清期における土司の統治に焦点を当て、文献史料と口頭伝承・儀礼などのフィールド調査データを併せて検討し、清代貴州中部苗族の代表的な支系である高坡苗族の伝統社会とその文化の変遷過程を解明することを目的とする。そして、多様な地域性という視点から苗族の伝統社会の独自性、苗族アイデンティティの形成を再考する。

受賞の言葉

このたびは、「スミセイ女性研究者奨励賞」をいただき大変光栄に思います。研究者の道を選んで以来、長いブランクが2回ありました。最初はフィールド調査によるケガで、2回目は出産育児でした。研究を続けていく決心は変わらないのですが、子育てとの両立には常に不安と焦りがあり、何度も挫けそうになりました。今回の受賞は私にとって何よりの励みとなり、心から感謝しております。今後一層研究に精進してまいります。



盧 回男

日本女子大学
現代女性キャリア研究所・
人間社会学部心理学科

研究 テーマ

韓国と日本における、女性のアイデンティティの 生涯発達の比較研究

内 容：女性意識の変化と社会変容によって、女性の社会参加と多様な領域での活躍が求められるようになった。経済的状況の変動や文化の固有性からみれば、多少の相違はあるものの、日本と韓国の女性の社会参加の変化は類似した点が多い。本研究では、両国の類似点と相違点をもとに女性の活躍を促進するため、それを妨げる問題点を明らかにし、相互の改善点を模索することを目的とする。

受賞の言葉

このたびは助成対象に選んでいただきありがとうございます。研究と子育て、仕事の両立に葛藤することも多々あるなかでの受賞のご連絡は、暗いトンネルの向こうから見えてくる光のようで、子どもたちと一緒に研究を続けてもいいよと背中を押していただいたようでうれしかったです。今回の受賞は研究の大きな励みにもなり、家族の精神的支えにもなります。少しでも社会貢献につながる研究ができ、子どもたちと一緒に成長もできるよう、より一層励みます。



伏見 裕子

立命館大学 非常勤講師

研究
テーマ

発達障がいの早期発見をめぐる歴史と意味 -母子保健との関連を中心に-

内 容： 現在、乳幼児健康診査をはじめとする母子保健関連施策では、発達障がいの早期発見が目指されている。対象となる子どもを切れ目なく支援する仕組みづくりが急速に進められているが、障がいを指摘されることを恐れる親は少なくない。本研究では、発達障がい母子保健の対象となった経緯や、それが母親・父親・子どもあるいは医療従事者、保育・教育関係者等にとって持つ意味を明らかにし、親子が安心できる母子保健のあり方を模索する。

受賞の言葉

大学院生のときに2人の子どもを出産し、先生の理解と家族および周囲の方々の協力を得ながら研究を続けてきました。博士号取得後、複数の大学等で非常勤講師を掛け持ちしながら新しい研究テーマに取り組むことの困難にぶつかっていたとき、受賞の連絡を受け、本当に救われました。両立の悩みと楽しみは子どもの成長とともに変化しますが、この助成を活かして柔軟に対応し、子育ての環境を整えて研究に励みたいと思います。



横山 晶子

一橋大学 社会学研究科
※2017年4月より国立国語研究所

研究
テーマ

危機言語の言語継承に向けた教材開発研究

内 容： 本研究の目的は、消滅の危機に瀕した言語(危機言語)を次世代に継承するために、地域と連携して言語教材を作成することである。琉球諸地域では、危機言語の記録のために文法体系全体を明らかにする記述研究が盛んに行われている。しかし、従来の研究は専門的で、地域の言語継承活動に活用することが難しかった。本研究では、言語継承に利用できる資材を創出するとともに、地域に持続可能な言語継承活動のシステムを形成する。

受賞の言葉

このたびは「スミセイ女性研究者奨励賞」に選んでいただき、深く感謝しております。出産後の生活の変化は想像以上で、本当に研究が続けられるのか不安でしたが、本助成をいただくことで、研究時間を確保できる見込みができました。子どもを持つことは研究生活の大きな転機になりましたが、同時に短い時間で集中し、研究の意義を再考する機会にもなりました。今後も家族との時間を大切にしながら、更なる研究の発展に努めてまいりたいと思います。

第7回(2013年度)受賞者最終報告



第7回受賞者から、助成期間を終えて
研究環境や子育て環境がどのように変わったのかを
ご報告いただきました。

井岡 瑞日 立命館大学 非常勤講師

研究継続中での生活環境の変化について

本助成によって旅費や書籍購入費用の捻出ができ、参加したい、目にしたいと思ったら即行動し積極的に調査に出向くことができました。人やモノとの研究上の豊かな交流を図ることができ、博士論文執筆後の新たな研究課題にも着手できました。



鄭 智允 愛知大学 地域政策学部 准教授

研究継続中での生活環境の変化について

受賞2年目に愛知大学の准教授に就任し単身赴任することとなりました。子どもの気持ちが心配でしたが、「僕の仕事は保育園でいっぱい遊ぶこと。お互いに頑張ろうね。」と励ましてくれます。この家族のあり方に理解を示し、支えてくれる夫にも感謝で一杯です。



大門 碧 京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科

育児と研究の両立を取り巻く環境について

本助成の開始時期が、博士論文執筆終了直後だったこともあり、共同研究への誘いや研究会での発表依頼を多くいただいた2年間でした。また、子育てと研究を両立する環境への意見を求められることも多く、育児を行っている研究者の環境改善を目指す動きを肌で感じました。



中野 千野 早稲田大学大学院 日本語教育研究科

研究継続の中での生活環境の変化について

受賞をきっかけに、喘息だった子どもの体調が上向いていきました。それは、私自身が研究を続け、充実して過ごすことで自然と笑顔になり、その笑顔が子どもの元気の源となっていったからだと思います。2年間そのような毎日を過ごすことができたのは、本プロジェクトのおかげです。



南郷 晃子 神戸大学大学院 国際文化学研究推進センター

研究継続で得た成果

本助成によって研究環境が一転しました。延長保育を利用できるようになったため、学内プロジェクトに参加し、共同研究に携わることが可能となり、研究活動の場も広がりつつあります。2015年度からは大学の有給研究員としての立場を得ることができました。



第7回(2013年度)受賞者最終報告

二村 淳子 鹿児島大学 学際研究院教育センター 専任講師

研究継続で得た成果

この2年間で、論文を6本書き、学会などでの口頭発表、出版にも力を入れました。この成果が評価されてか、2016年4月から、鹿児島大学の学際研究院教育センターに専任講師として着任できました。常勤職に就くことができ、家庭の経済的な安定を獲得できています。



能美 由希子

研究継続の中での生活環境の変化について

学生や非常勤の立場では産休・育休の手当はなかったため、研究できる環境を整えるための支援となる本プロジェクトの存在は大変ありがたかったです。子どもも私も生活リズムが安定したことがよかったのか、産後うつの辛い時期を乗り越えることができました。



日笠 晴香 東京大学大学院 人文社会系研究科

育児と研究の両立を取り巻く環境について

受賞により2年間という期間で研究活動を見通せたことが大きな支えとなりました。第一子出産後の体調不良は厳しい経験でしたが、第二子を無事に出産した現在では、医療に関する意思決定のあり方を考える私自身の研究の糧になったように思います。



八木 瑞香 新潟大学大学院 現代社会文化研究科

育児と研究の両立を取り巻く環境について

女性研究者として、本助成によってどれほど励まされたか言葉に言い表せません。娘たちには、母親でもやりたい勉強をしてもよいこと、世の中には女性の自己実現を応援してくれる大人たちが大勢いることを、自分の経験から教えてあげられるのは大変な喜びです。



山口 えり 早稲田大学 重点領域研究機構 東アジア「仏教」文明研究所

研究継続で得た成果

助成1年目は積極的に研究会などに参加することで、周囲に研究継続の意思を示すことができました。2年目に日本学術振興会特別研究員に採用され環境は大きく変わりました。今では、自分の研究時間を確保でき、前向きに学会発表や論文掲載に向き合えています。



横田 和子 目白大学

育児と研究の両立を取り巻く環境について

受賞により、子連れで出張することができました。また、研究補助で学生に帯同してもらい、研究が進捗しましたし、子どもにとっても母の仕事をおぼろげながらも理解する場にもなりました。子育て中の女性研究者は常に時間に追われています。そうした研究者に光が当たる社会であってほしいと思います。

